日本建築史研究の英訳について

山野善紀

Ⅰ　はじめに

翻訳に正解はない。翻訳という営みは根本的に再創作であるからである。いかなる言語の組み合わせであろうとも、語彙的・文法的・修辞的・音韻的その他あらゆる要素について完全な対応関係を保つことは不可能であろう。原文は翻訳者の理解というフィルターを通じて一度意味にまで分解された後、目的言語で再構成される。翻訳者は原文を読み解き、論理的構造、著者の意図、著作の意義、想定される読者層、目的言語における文章構成の慣習等を考慮した上で、自身の能力の制約の範囲内で最良と思われる表現を追求するのである。

筆者が2017年より取り組む日本建築史入門書の英訳では、和文英訳・学術翻訳・技術翻訳の要素が複合した独特の問題が発生した。本稿では翻訳の過程で得られた知見をもとに、既存の日本建築史に関する英文書籍、特に日本語の原著を持つ著作を例に挙げ、日本建築史研究の英訳に際して発生する諸問題について振り返る。

Ⅱ　学術用語

学術用語の翻訳は、翻訳者にとって特に神経を使う事項である。用語の歴史、発展、本質は、各分野の基礎的な研究の一つであるため、解釈が発展したり、時には研究者間で見解が対立しうる。注意深い訳語の選択を行わなければ、原著者の立場と相違する解釈や、現在の定説にそぐわない認識の流布等、意図しない結果につながりかねない。その一方で目的言語での可読性や、過去の翻訳に基づいた主流の訳語など、時に矛盾する要求のバランスを取りながら落としどころを探る必要がある。

「多宝塔」は翻訳の難しさを端的に示す好例と言える。多宝塔の語源である「多宝」は、法華経と深い関りを持つ多宝如来（Skt.Prabhūtaratna）に由来し、当初は専ら天台宗の建築形式だった（清水1992）。ところがこの語はかなり早い段階から建築の外観上の形式として認知されるようになり、今日では多宝仏ないし法華経とは無関係に、下層が正方形平面で、上層の塔身が円形の二重塔の形式一般を指して用いられている。

現在の用法と語源に乖離がある語をいかに訳するか、という課題に対して、少なくとも

三つのアプローチが考えられる。うち、（1）（3）は出版物において実際の用例が確認できる。

1　英単語に置き換える：Many-jewelled pagoda/ “Many treasures” pagodaなど

英単語に置き換えるアプローチは、英語での可読性を優先する。英語文献を読む上で、外来語の多さは可読性を大きく損ねる。日本語はカタカナを用いることで外来語を一目でその他と区別することができ、助詞・助動詞との組み合わせにより、未知の単語あっても品詞を特定できるという特性を持つ。ところがアルファベット言語である英語では、外来語を示す方法はイタリック体や大文字表記に頼り、品詞は文脈から類推することとなる。字体変化は意図しない強調効果を生み、滞りない読解の障害となる。総じて日本語以上に外来語の使用はハードルが高く、読み物を需要する層を想定読者に含める場合、どの用語を音写にするかは慎重に吟味する必要がある。特に日本建築史の分野では、人名、社寺名、地名ほか、どうしても音写する必要がある固有名詞が頻出するため、それ以外での音写の多用はなるべく控えたい。

多宝塔の「多宝」が多宝如来に由来するとの立場をとれば、漢字を単純に英単語に置き換える訳が正確性の面から許容できるかは議論の余地があるかもしれない。一方で「多宝」もまたPrabhūtaratnaの漢訳である。一般的英単語に還元してしまったことで、固有名詞の派生であることは読みとれないが、現代日本語での用法そのものが語源から離れていることを考慮すればよくニュアンスを捉えているともいえる。初学者を主たる読者層に想定し、論旨に影響がなければ採用を検討すべきアプローチと言える。実際にこの訳語を採用した例としては西和夫「What is Japanese Architecture ?」がある。

> 密教建築には、円形平面の饅頭型の塔身の上に宝形造りの屋根をかけ，相輪を立て（これを宝塔という），さらに裳階を付けた多宝塔が作られた（後に円形平面は四角形平面になる）。（西1983）
>
> They also adopted a new type of pagoda, the “jewelled pagoda” (hōtō), characterized by a roughly hemispherical body with a pyramidal roof and spire atop it. Later the central hemispherical area was enclosed by subsidiary sections with pent roofs (mokoshi) on the four sides, creating the “many jewelled pagoda” (tahōtō; fig. 12). Thereafter the hemispherical portion was removed, save for a rounded vestige above the pent roof and below the main roof.（西1985）

翻訳・翻案を担当したMack Hortonは、本書では完全に英単語に置き換えた訳語に括弧書きで日本語の音写を附す手法を多く取っている。専門的な関心のある読者以外は括弧書きを読み飛ばし論旨だけを読み、より専門的な関心を持った際に改めて日本語での発音が

確認できるようになっている。多宝塔を純粋に形態の面から説明する西の原文ともよく対応する[1]。英語版の裏表紙に「（前略）The total picture constitutes a delightful reading experience for anyone with the slightest interest in architecture and the people who create and use it」とある通り、本書は専門家や学生だけでなく、一般読者が読み物として楽しむことも想定している。読みやすさを優先した訳語を選択するのは、首尾一貫しており、学習目的の読者と娯楽目的の読者を思い切って切り分けつつ、双方の要求に応えている。

2　語源に遡る：Prabhūtaratna pagoda

次にPrabhūtaratna pagodaは語源的な対応関係を重視した案である。仏教関連文献では如来・菩薩等の固有名詞はサンスクリット表記を使う、もしくは並記するのが一般的なため、多宝如来のサンスクリット名Prabhūtaratnaを用いて訳した。語源的との対応関係が正確であり、固有名詞を用いることで文章全体の具体性が増す点は、読みやすいとされる英文の一般的条件を満たし、一見好ましい点もあるように思える。しかしながら筆者が調べた限りにおいて日本建築史関連の英語書籍にこの訳語の用例は見つからなかった。その理由として以下の三点が考えられる。第一に、日本で多宝塔と呼ばれる建築が全て多宝如来と対応しているという誤解を生む恐れがある。既に述べた通り、日本において多宝塔は塔の形式に対する名称として定着しており、多宝如来・法華経との厳密な対応関係は失われて久しい。第二に、日本語を全く含まない訳語により、仏教圏における国際的な様式と誤解を与える恐れがある。清水によれば中国における「多宝塔」は特定の形式を持たないため、この認識は誤りとなる。そして第三に、日本人に全く通じない可能性が高い点である。研究者であっても多宝如来のサンスクリット名を即座に認識できるのは仏教史家以外では稀であろう。上述のmany jewelled pagodaならば類推も可能だが、Prabhūtaratna pagodaではコミュニケーションに支障をきたす可能性が高い。

Prabhūtaratna pagodaの採用が最も適切な状況があるとすれば、建築よりも宗教・思想史を主眼とした論文中で、日本における法華信仰の一例として触れる時などが想定できる。その場合、Prabhūtaratna pagodaが指すのは天台宗の初期多宝塔と、形式・名称を問わず多宝仏に関わる塔となり、日本における仏教寺院建築の一形式としての「多宝塔」とは違った範囲・対象を指すこととなる。

3　音写する：Tahōtō

最後にTahōtōは敢えて訳さないことで上記の問題を回避している。日本語そのままであるため、日本人研究者とのコミュニケーションは円滑に行われ、恣意性を排除できない

複数の訳語により議論が混乱することも避けられる。ある意味究極の訳語と言えるが、この訳の明確な欠点は読者が単語自体から一切情報を得られないことにある。読者層を専門家に限定する場合を除き、簡潔で的確な用語解説を挟むことは前提条件となる。非日本人読者を想定した文章構成が事実上必須となるため、英文執筆者には高度な能力が要求され、英文による書き下ろし・翻案・補筆翻訳に向き、逐語訳をベースとした翻訳には向かない。力量を問われる訳語でありながら、Tahōtōを採用した英語文献は多い。ここではJapanese Architectures and Gardens（太田（編）1966）を挙げる。

> Tāhōto was derived from the hōtō, a stupa sacred to Tahō Buddha (Prabhuta-ratnam). The hōtō has a cylindrical body with a rounded top capped by a pyramidal roof. Small hōtō of stone and wood have been found. When the hōtō was copied in a larger wooden structure, the body was surrounded by lean-tos so that only a small portion of the body was visible above the lean-to roofs (fig. 197). As a result, the building appeared double-roofed, with a square lower plan and circular upper plan. Structurally speaking, it is a two-storied structure with a square lower story and a circular upper story. Those which are especially large are called daitō (great towers).

巧みな文の構成と語彙の選択により、簡潔かつ丁寧な解説で可読性の低下と誤解を避けつつ日本での呼称をそのまま使っている点は翻訳者の力量の高さが現れている。第一文で「…the hōtō, a stupa…」と、読者にとって未知の単語が「塔」であることをいち早く示しているため、その後の説明に無理がない。文体の明快さを損ねる受動態の多用、特に冒頭第一文を敢えて受動態で始めた意図に関しては不可解だが、それを差し引いてなおこれほどの内容をこの語数に収めるのは驚異的と言って良いだろう。

本格的な日本建築史研究者であれば、日本語による読解能力、術語の知識不足は想定する必要がない。仮にこの層を主な読者層と定めるならば、解釈に幅のある用語に関してはそのまま音写するのが最も誠実で誤解のない手法であろう。しかしながら、十分な日本語能力と知識を備えた専門家に対して、敢えて英語で執筆する意義は薄い。専門家を対象とした論文等の翻訳であっても、想定すべき読者はむしろ日本語能力ないし日本建築への知識に乏しい隣接他分野の専門家であると私は考える。

特定分野への深い専門知識を想定しない場合、日本語の専門用語の音写を過用した翻訳は可読性を大きく損ねることになる。特に英語圏の初学者の関心を促すという目的で執筆するならば、大筋の論旨に関わらない範囲では、予備知識なしでも大意が推測可能な訳語を使用する事、多少の解釈の偏りは許容して、既存の訳語を流用する決断も必要になり得る。

また、学術翻訳には研究者間での意思疎通に用いられるという側面がある。参照した書籍により著しく用語が違うことは議論の妨げになる危険があり望ましくないことも考慮に加える必要があろう。

最終的にどの形式を取るのかは、原著者・翻訳者間での協議の上で、その都度最も合目的な訳語・表現を模索するほかなく、両者間で会話が成立しうる知識の基盤が必要となる。

Ⅲ　補筆と改変

日本人向けに書かれた原著がある場合は、書下ろしに近い大胆な補筆が必要になる場合がある。想定される読者の文化的背景が異なるためである。特に想定される常識（一般教養）の差異は専門家を対象とした論文・学術研究書よりも、初学者を対象にした「易しい本」でこそ重要になり、日本人や研究歴の長い翻訳者が英文で執筆する際には特に注意を払うべき事項となる。

「対訳　日本人のすまい（Bilingual THE JAPANESE HOUSE THEN and NOW）」（平井1998）は書名の通り和文と英文を併記した意欲的な著作である。翻訳の方針として「逐語訳形式をとらず、各パラグラフだけを対応させ、それぞれのパラグラフの内容を英語で正確に伝えることを第一の目標とした」とし、大変な工夫の跡が伺われる。しかしながら、翻訳者が原著の表現に気を遣いながら遠慮がちに翻訳した印象もまた否めず、補筆・改変も限定的である。

> 建物の中がどのように使われたかがわかる資料に，大嘗宮の正殿がある。大嘗会は，天皇が即位したのちはじめての秋に収穫を神とともにする祭で，臨時の神殿がそのたびに建てられた。この神殿である大嘗宮の正殿は，歴代ほとんど同じ形式が守られている。正殿の平面は，周囲を壁で囲んだ「室」と呼ばれる部分と，周囲がみな扉で開け放すことのできる「堂」と名づけられた部分とに分けられている。
>
> 室の部分には畳が何枚も重ねられた神の寝床が用意され，そのかたわらには神と天皇の座がしつらえてある。閉鎖的な「室」が寝室であったことがわかる。
>
> The Main Hall of Daijōgū［Daizyôgû］shows how the inside of buildings was used from the Asuka through Heian periods（6 th–12th c）. The *daijōe*［*daizyôe*］was a Shinto festival, in which the emperor celebrated the harvest with the Harvest God. The festival is held the first autumn of a new emperor's reign, and a special sanctuary was built for this purpose. This special sanctuary is known as Daijōgū, and the form of the Main Hall has remained largely unchanged over many generations. The space inside the hall contains a walled area known as *shitsu*［*situ*］,

and an area called *dō* which has pivoted or hinged doors that can be completely opened up.

Inside the *shitsu* area, several layers of *tatami* are piled up to provide a bed for the God, and beside this are the God's seat and the emperor's seat. We can deduce that this closed area was used as a bedroom.

翻訳者による加筆箇所を下線で示した。省略された主語の補筆や複文の分割など、日本語の英訳で常用される手法の外に、下線部で示した3カ所に注目したい。まず、「祭」をa Shinto festivalと訳す。これは原文では「収穫を神とともにする」の記述に内包される祭が神道・カミマツリに関係するとする示唆を補うものである。the Harvest Godと断る点は、一神教圏の読者に多神教の神の一柱であることを暗に示す。扉をpivoted or hinged doorsと限定するのは、取り外さなければ全開放できない引き違い戸を意識したのだろうか。当時の英語圏で日本建築と引き違い戸に対して固定的なイメージがあったのかもしれない。

文法的な対称性もかなり保っており、7文中で6カ所も受動態が使われる。

部分的な補筆はあるが、文の前後関係とパラグラフの分割位置の調整が行われないことが枷になっている印象を受ける。語彙に関しては「臨時の」を敢えてspecialと濁しtemporaryとしなかった意図も気になるところだが、今回はこの点には触れず、パラグラフ構成に注目したい。

まず第一文と第二文に着目する。第一文で初出の大嘗宮の説明を行う前に、第二文で大嘗会の説明を始めている。日本語の原文で読む際にこのことは大きな障害にならない。「大嘗宮」と「大嘗会」が並べば、後者がある種の行事であり、前者の建築施設で執り行われること、さらには「宮」の字からそれが支配者ないし宗教の関わる行事であろうことは、知識がなくとも予測できるためである。しかしながら英語読者にとってDaijōgūやdaijōeは未知の音の羅列であり、人名でも、神名でも、役職名でも、地名でも、施設名でも、組織名でも、行事名でもあり得る外来語に過ぎず、ただ綴りの共通部分が両者の相関を予感させるのみであり、読みやすい配列とは言えない。大嘗宮と大嘗会の関係をまず明らかにしてから大嘗会の説明に入るのが合理的な説明順と考えられる。これは英訳第二文から第四文の内容の順序を入れ替えることで、使用語彙に一切手を加えることなく容易に実現できる。

次に第一パラグラフの最終文と第二パラグラフの関係に注目したい。英訳の第一パラグラフは5文中4文までが大嘗宮が何であるかの導入で、最後の一文のみ大嘗宮内部の具体的説明をしている。第二パラグラフは2文から成り、第一パラグラフ末尾の一文のさらなる詳細を述べる。大嘗宮の説明が簡潔に済む日本語では特に違和感はないが、英文ではパ

ラグラフの役割分担が不明瞭である。第一パラグラフ末尾の文は切り離して第二パラグラフ冒頭に移動すると、第一パラグラフが大嘗宮という言葉に対する説明、第二文が大嘗宮の形態に関する説明と、段落の機能を明確化できる。

なお、パラグラフ構成の問題とは別に、第一パラグラフの最終文に関してもう一点、注目したい。日本語原文の第三パラグラフは以下のように続く。

> 斑鳩宮址で見付かった住居の遺跡は，桁行を８分の５と８分の３の所で分ける間仕切があり，８分の５の部分は板敷，あとの部分は土間であったと考えられている。このように２つの部分に仕切られた建物は，いくつも見付かっている。法隆寺東院の伝法堂も，法隆寺に移される前は上層住宅の一棟であったと考えられ，住宅であったころの平面はやはり２つの部分に分かれていた。２つの部分はいずれも板敷であったが，一方は壁と扉で閉ざされ，一方は開放的で露台へひろがっていた。

第三パラグラフの内容から、第二パラグラフの論旨の上で重要なのは大嘗宮正殿が（１）二つの部分に分けられていて、（２）その片方が開放的でもう片方は閉鎖的である、という二点にあることがわかる。原文の文法的構造にこだわらず、この二点を強調する書き方に改めると論点が明確になる。例えば比較する二語を近づけ文法構造を反復させる等の工夫が欲しい。また、「contain：～が含まれる」より「consist：～から成る」とした方が２室のみであることが明確になるだろう。

以上を反映させると、以下のような訳文が得られる。

> The Main Hall of Daijōgū［Daizyôgû］shows how the inside of buildings was used from the Asuka through Heian periods（6 th–12th c）. Daijōgū is a special sanctuary built for a Shinto festival called Daijōe. In the festival held in the first autumn of a new emperor's reign, the emperor celebrated the harvest with the Harvest God. The form of its Main Hall has remained largely unchanged over many generations.
>
> The hall consists of two parts, the enclosed *shitsu* and the open *dō*, the former surrounded by fixed walls and the latter by pivoted or hinged doors. Inside the *shitsu*, several layers of *tatami* are piled up to provide a bed for the God, and beside this are the God's seat and the emperor's seat. We can deduce that this closed area was used as a bedroom.

パラグラフやセンテンスの長さが揃うことにより単調になってしまった点、severalを筆頭に具体性に乏しい単語の使用など更なる改善の余地が残るが、、パラグラフの分割の自由があれば、現状の語彙を大きく変化させずとも可読性は改善されたと考える。なお、学術的著作では文の順序や微妙な表現が先行研究の成果等を意識して特別に選択されている場合があり、実際の翻訳では原著者の十分な監修の上で改変するのが大前提である。

これを井上充夫「日本建築の空間（Space in Japanese architecture）」での大嘗祭および大嘗宮の初出箇所と比較する。

歴史時代まで伝えられた神道儀式のうち、最も古い形をのこしていると認められるものに、大嘗祭　新嘗祭・神今食・神嘗祭・相嘗祭などの一連の祭りがある。これらはいずれも神に食物を供える儀式であるが、とくに新穀・新酒を主な供物とする点から、農耕民としての日本人の原始信仰の重要行事であったことがわかる。のみならずこれらの祭りでは、…（以下略）

Among Shinto ceremonies that survived into historic times, those recognized as having preserved the oldest forms include the Daijōsai, Niiname Matsuri, Jingonjiki, Kanname no Matsuri, and Ainame no Matsuri. These were all ceremonies in which food was offered to a god, and the presentation of newly harvested cereal and freshly brewed sake indicates how important these observances were in the primitive faith practiced by the agrarian Japanese. Another common feature of these observances was…

こちらは原文そのものがかなり英訳向きなこともあり、語順の入れ替えは必要ない。「…儀式であるが」の見かけ上の逆接を「and」と順接にしたり、「のみならず」を否定形を避けて「Another」を採用していることなど、文体上の工夫が見られる。話題を明示した上で実例に進むので、混乱の余地がない。続いて大嘗宮の初出箇所は次段落である。

まず大嘗祭についてみると、これは天皇の即位後はじめての秋に行なわれる一代一度の大祭で、主な儀式は宮城内朝堂院の中庭に臨時に設けられた祭場で行なわれる。

The Daijōsai was a major, once-in-a-generation observance held in the first autumn after an emperor's accession to the throne. The main ceremony took place in a temporary shrine, the Daijōkyu, erected in the courtyard of the Official Quarters (Chōdōin) within the Imperial Palace grounds of Heiankyō (present-day Kyoto).

こちらは補筆が見られる。

まず第一文の第一語が「大嘗祭」だが、前段落で「最も古い形をのこしている神道儀式」であることを既に示しているため、ここでは補筆を行わず原文通りの流れで解説に入り、そのまま祭儀の場の説明に移る。「祭場」は「大嘗宮」と具体的な名称を示す点で原文と異なる。日本語原文では「大嘗宮」の初出はここから三段落後の末尾一文であり、特に定義されることなく導入される。これは先述した漢字語の類推を前提とした文章構築であり、訳文では誤解の起こりにくい位置で先んじて提示している。また「宮城」をより具体的に「Imperial Palace grounds of Heiankyō」とし括弧書きでpresent-day Kyotoと補足を加える。朝堂院はthe courtyard of the Official Quartersと訳した上でローマ字表記を括

弧書きにするなど、可読性と正確性を両立するための柔軟な工夫がみられる。

本著の翻訳は一つの到達点と呼ぶべき完成度を誇っている。もちろん類まれな翻訳者の能力あってこそ実現したことは疑いないが、本書が純然たる日本建築史の入門書というより建築空間論に軸足を置いた研究書としての性格が強いことも有利に働いている。論文や研究書は用語の特殊さや言葉遣いの厳密さが翻訳の難所である反面、入門書よりも論点が絞られている。入門書の場合、言及すべき事項を網羅し、粗密なく用語・概念を解説する必要があるため、明確に論旨の一部を構成しない解説のための解説が必要な場面は避けられない。これに対し論文・研究書は論旨を支持するという一つの目的に対し、すべての文が明確な役割を担って文章が構成される。語彙と表現は文化の影響を逃れ得ないが、論理は言語・文化に依存しない。理論展開の筋道さえ検証可能であれば、用語解説は最小限でも執筆の目的は達成される。翻訳者に求められるのは、英語の文章力や文化の差に対する感覚以上に、専門分野に対する知識、特に先行研究を意識した細かい言い回しに気付き、論旨に関わる内容、関わらない内容を判別する力であろう。

Ⅳ　結　　び

近年の機械翻訳の進歩には目を見張るものがあり、所謂「縦の物を横にする」翻訳が完全に機械に代替される日が目前に迫っていることは最早疑えない。しかしながら機械学習による翻訳が実現するのは最大公約数的な最適解であり、本文で検討したような学術的立場・執筆意図・想定読者にまで遡ったケースバイケースな判断は最終的に人間を必要とする。その際肝要となるのは原著者の協力体制と、原著者の解説を理解する上で十分な知識を持った翻訳者である。翻訳新時代に求められるのは専門知識のある翻訳者、そしてそれ以上に翻訳に理解のある専門家であろう。

註

1　特に、限られた紙面でも根来寺大塔に代表される初層に円形平面を持ついわゆる大塔形式と、石山寺多宝塔に代表される初層が方形平面の多宝塔が存在することに触れるのは特徴的。多宝塔の形態を簡潔に描写する上での難所だが、遠回しな表現で直接的な言及を避けるのではなく、明確に二種類の平面があることを示している。

参考文献

井上充夫　1969『日本建築の空間』　鹿島出版会
清水擴　1992『平安時代佛教建築史の研究』　中央公論美術出版
西和夫・穂積和夫　1983 『建築の絵本　日本建築のかたち　生活と建築造形の歴史』　彰国社
平井聖　1998『対訳日本人のすまい』　市ヶ谷出版社

Hirotaro Ota (ed). 1966. Japanese Architecture and Gardens. The Society for International Cultural Relations

Inoue, M. 1985. Space in Japanese Architecture. Weatherhill

Kazuo Nishi, Kazuo Hozumi. 1985. What is Japanese Architecture ? : A Survey of Traditional Japanese Architecture. Kodansha International